

# 遡及的不定詞について

中村 ちさと

## 序 論

Jespersen (1961. rep. V. pp. 221 f.) では the first thing to settle のような構文を “those cases in which an active infinitive was said to have a passive meaning” (能動形不定詞が受身の意味を持つと言われていた場合)、あるいは “the construction in which a transitive infinitive refers back to something preceding it which is notionally its object” (他動詞の不定詞が理論上はその目的語である、先行するものにもどって言及する構造) と特徴づけ、retroactive infinitive (遡及的不定詞) と呼んでいる。この構文は不定詞の態と不可分に結びついており、多様な問題を含んでいる。

本論文ではこの retroactive infinitive について There is no time to lose. を出発点として研究するが、まず第1章では infinitive の発生と発達を歴史的に考察しておきたい。これは retroactive infinitive の性質が歴史的考察によって明らかにされる可能性があると考えられるからである。ついで第2章では各学者による先行研究を概観し、第3章では用例と照らしあわせながら諸説を整理して、筆者の結論を示したい。

## 第1章 不定詞の発達の歴史

### 0. 不定詞の定義

不定詞は元来、動詞の語幹が文中で主語や目的語として名詞的に用いられたものをいう。ほかに動詞語幹は to を伴って、主語、目的語として機能したり、名詞、形容詞の後置修飾語としてそれぞれ形容詞的、副詞的に用いられ、さらに他の動詞が表す意味内容に対して、その目的・理由などを補足的に述べるために用いられることもある。これらすべての用法における動詞語幹も不定詞とよばれる (宇賀治, 『英語青年 2001. 10』「不定詞の歴史的発達」17)。

### 1. 不定詞の形態論上の発達

#### 1. 1. 不定詞の起源

不定詞は印欧語族の方言の1つであるゲルマン祖語では行為を表す中性名詞であった。ゲルマン祖語から分岐した西ゲルマン諸語では、名詞として格屈折をもち、属格・与格で、主格・対格語尾とは異なる独自の屈折語尾をもった (宇賀治 17)。

#### 1. 2. 各期における不定詞の形態論

##### 1. 2. 1. OE

OE は西ゲルマン方言から派生したものであり、格屈折を継承していた。主格と対格は -an, 与格は -enne または -anne で方向を表す前置詞 to を伴った (宇賀治 17)。

##### 1. 2. 2. OE 末から ME

OE 末期から ME 初期にかけては強勢をもたない音節の母音 /i, æ, a, u, o/ は一様に弱化し、次第に -e へと水平化した (宇賀治 17)。

##### 1. 2. 3. Mod. E

紙面の関係で省略する。

### 2. 不定詞の機能上の発達

#### 2. 1. OE 期における不定詞の性格

OE 期では不定詞は名詞的性格が強かった。即ち、文の主語、目的語として機能していたと言える。

#### 2. 2. ME 期における不定詞の性格

ME 期において不定詞に動詞的性格があらわれるようになる。即ち、目的語、副詞をとる。受身にも完了形にもなる。この点では -ing 形の動名詞と同じであるが、所有格の代名詞をとることはない (中島 212)。

一方、不定詞の態に関しては未分化であったといえる。その例として、He *lēt flūres gardere on pē mēde* (=He caused the flowers to be gathered on the meadow) – *Floris and Blancheflur* や、And thenne the kyng *lete serche* all the townes (=and then the king caused all towns to be searched) – *Mallory* などが挙げられる (中島 196)。

この2例は現在なら受動態にすべき意味を持ってい

るが、受動、能動に無関係だったのは、不定詞の名詞的性格による。この点は非常に重要である。

## 第2章 先行研究

### 1. 遡及的不定詞に関する Jespersen の所論

遡及的不定詞とは、不定詞の前にある名詞をその目的語として従える不定詞である。the first thing to settle では、不定詞の前の the first thing は不定詞の意味上の目的語であるが、この不定詞は形は能動態であっても、理論上は受動態の意味を持ち、能動態よりも受動態のほうが論理的である。しかし、どちらの態をとるかについては、一貫性は確立されていない。

存在をあらわす語の後 (there is, have, with, without, want) に現われる遡及的不定詞の典型的な例として次のようなものが挙げられる。There is no more to say. | There was nothing to fear for his guest's life. | There is nothing to forgive. |

to lose と to be lost は対比されることが多いが、There was no time to lose と There was no time to be lost は実質上は同じ意味である。しかし、このように意味が常に区別されるとは限らないものの、区別される場合もある。There was nothing to do there. (=nothing to occupy us) There was nothing to be done there. (=nothing that should or could be done) | There was nothing to see there. (=nothing worth seeing). There was nothing to be seen there. (=nothing that could be seen, nothing visible)

もしこのような不定詞が受動態の意味をもっているとらえるなら、問題が生じる場合がある。たとえば、There is (We have) nothing to fear において、to fear が to be feared の意味だと考えられるなら、その同義の There is (We have) nothing to be afraid of はどうなるのか。be afraid of の受動態とは何なのか。

上の論に対する筆者の考えを述べる。この Jespersen の考えは詭弁である。Jespersen は There is nothing to fear と There is nothing to be feared が同義であると考えているが、このことについては、3. 1 で後述するが、筆者の考えでは、誤りであると言える。故に be afraid of の受動態が何であるかをもち出すこと自体、詭弁であると言える。

### 2. Quirk et al. の所論

ここでは、Quirk et al. 著 *The Comprehensive Grammar of the English Language* より、抜粋、引用する。

遡及的不定詞という語は使われていないが、遡及的不定詞を扱った項目である。

ある条件のもとでは主語が for . . . to によって表されていない場合、機能上のあいまいさが生じることがある。そして動詞は自動詞的にも他動詞的にも使われる。後者の場合、主語または目的語として先行するものを考慮に入れないための意味論的制限はない。次の文を考えてみる。

He is the best man to choose.

この文は [a] すなわち主語の解釈は可能だが、等価の関係節は不可能であるということか、[b] すなわち目的語の解釈そして二者択一の定形関係節で置き換えられるということの意味する。

He is the best man	{	to do the choosing.	} [a]
		to make the choice.	
	{	that we (etc) can choose.	} [b]
		for us (etc) to choose.	
		to be chosen (by us, etc).	

上の例が示すように、不定詞節の中で推定されるべきなのは時制だけではない。法はもっと不定の要素であり、副詞的不定詞節の中で説明される範囲の意味や名詞句後置修飾語にも使われる。

The time to arrive is. . . ['at which you should arrive']

不定詞節に関しては、他の非定形節ほど相は限定されていない。

The man	{	to meet	} is Wilson.
		to be meeting	
		to have met	

後置修飾の不定詞節は、能動形、受動形ともに可能である。

He is the best man	{	to choose.	} to be chosen.
		to be chosen.	

ある場合には、能動態あるいは受動態不定詞は、意味の変化なしに、或いはほとんど変化なく、どちらの態も等しく可能であるようにみえる。

Give me a list of the people	{	to invite.	} to be invited.
		to be invited.	

(招待する人のリストを私にください。)

The procedure	{	to follow	} is this.
		to be followed	

(従うべき手順は次のとおりだ。)

The best thing	{	to do	} is as follows :
		to be done	

There -構造については、態の制限はない。

There is { a lot { (for everybody) to do.  
                  to be done (for everybody).  
                  plenty { to do.  
                          to be done.

この、There-構文についての記述は、筆者にとっては、重大な問題である。本当にこのように断定できるのかについては、第3章で述べる。

### 第3章 遡及的不定詞の態

#### 0. 遡及的不定詞の定義

遡及的不定詞とは、不定詞の形容詞用法の1つであり、不定詞の形容詞用法は遡及的不定詞と非遡及的不定詞に大きく分けられる。遡及的不定詞とは、たとえば I have something to do. のように不定詞内に動詞の目的語に該当する名詞(句)を欠き、その先行する名詞(句)が論理的な目的語として、さかのぼって解釈される不定詞である。それに対し、非遡及的不定詞とは、I have no one to help me. のように、不定詞の修飾する語が不定詞の意味上の主語である不定詞である。

#### 1. 本論文の目的

遡及的不定詞の態は、①There is no time to lose/to be lost のように受動態、能動態のどちらも可能で、しかも意味が変わらないものと、②There was nothing to see/to be seen のように受動態、能動態のどちらも可能であるが、意味が変わるものの2種類がある。このように不定詞の態はさまざまに変化するが、本論文では①のように両方の態の使用が可能であり、且つ意味が変わらない遡及的不定詞の態を研究し、それらの態を決定づける要素が何であるかを研究するものである。尚、遡及的不定詞の中でも、不定詞の主語があいまいな、There is~構文を主な研究対象とする。

#### 2. 不定詞の歴史的発達の概観との関連

1章で述べたとおり、不定詞は元來行為を表す中性名詞であった。そのため、He deserves punishment. の punishment のように、主語を表現することも態を示す必要もなかった。この場合の punishment は「罰せられること」という受動の意味である。よく似た例に、the enemy's destruction of the city と the city's destruction by the enemy がある。destruction の前者の意味は「破壊すること」、後者は「破壊されること」であり、一語のみで状況により能動の意味になったり、受動の意味になったりする。この点は、不定詞が元來名詞で

あったことと結びつきがあると考えられる。即ち、不定詞が態に関して中立であり、本来特定の態と結びついていないということである。不定詞は OE では次例にみられるように、能動態で受動態の意味をあらわすことがあった。

Se god is to gelyfanne . . . Martianus pa het hine be-heafdian

(=That God is to be believed in . . . Martiaus then ordered him to be beheaded.)

ME 期に入って、1章で述べたような屈折語尾が消えていくうちに、不定詞は本来の名詞性を失い、それにつれて態についても徐々に中立性を脱して、受動形を発達させた。そして1400年頃までに受動意味を受動形で表現するようにはなった。しかし、今日においても受動意味の古い能動形不定詞がいくつか残っている。たとえば I am to blame./Much is (or remains) yet to do./a house to let などがそうである。

#### 3. 視点

##### 3.1. 序

①There is no time to lose.

②There is no time to be lost.

この二文は態が異なるものの、意味は同じである、と Jespersen も言っている。また、第2章で扱ったとおり、Quirk (2003) は There 構文については態の制限はない、とまで言っている。だが、果たしてそうであろうか。

①では、話し手(書き手)の視点は不定詞の行為者にある。即ち文の表面には現われていないが、for you/me/us などが念頭にあるものと考えられる。関係代名詞を用いて、There is no time that you/I/we can lose と書き換えることができることから明らかである。

これに対し、②では不定詞の行為者はさほど重要視されていない。このことは、①と同じ試みをした場合、There is no time that can be lost と書き換えることができることから明らかである。即ち②における話し手(書き手)の視点は曖昧であり、中立的である。

このようにこの二文で「視点」という点に注目した場合、この二文が伝えようとしていることは、厳密に言えば異なっている。この点について以下に述べると、①の文は表層的には不定詞の行為者(あるいは意味上の主語)は現われていない。また、遡及的不定詞の定義から考えても、②の no time は to be lost の目的語ではなく、いわば意味上の主語であるから遡及的不定詞というのは問題がある。①の no time は to lose

の意味上の目的語であるが、コンテキストにより不定詞の意味上の主語が明白であるために、言う必要がないため不定詞の主語は省かれている。それを省く理由として、文が冗長になる、などが考えられる。一方②では、不定詞の行為者(意味上の主語)に対する視点は全く重要視されていない。①と②を関係代名詞を用いて書き換えるのは、そのことを明らかにするための試みである。視点が①と②では異なるため、①と②が意味する事柄は変わってくる。

これまで①と②はまるでペアのように一緒に論じられてきたが、実は全く性質が異なるものであることがわかる。

### 3.2. 用例による検証

①のタイプと②のタイプをそれぞれ用例により検証する。紙面の関係で2例ずつとする。日本語訳は全て筆者による。

#### 3.2.1. ①型

As you say, one of the first things *to check* with a new theory of dynamics is conservation of energy. (*Scientific American*. 2002. Dec.)

(あなたが言うように、力学の新しい理論に関して確かめるべき最初のことの1つはエネルギーの保存である。)

不定詞の意味上の主語である *for us* は文脈上明らかなので、不定詞の態は能動態となる。関係代名詞を用いて書き換えると、As you say, one of the first things *that we should check* with a new theory of dynamics is conservation of energy. となる。

He suggests that there is something *to learn* from his history. (BNC)

(彼は歴史から学ぶべきことがあると示唆している。)

文の主語でもある *He* が不定詞の意味上の主語でもあるため能動態が使われている。上と同じ試みをする、He suggests that there is something *that he should learn* from his history. となる。

まとめとして、次のことが言える。即ち、不定詞の意味上の主語(行為者)が文脈上明らかな場合は、*for* は省略され、態も能動態となる。

#### 3.2.2. ②型

This means that the framework for the activity is itself communicative i.e. that there is something *to be communicated* to someone for some purpose.

(BNC)

(このことは、活動のための骨子はそれ自身コミュニケーションのためであることを意味している。即ち、ある目的で誰かに伝達される何かがあるという事である。)

不定詞の意味上の主語が明らかでない場合、不定詞の態は受動態となる。関係代名詞を用いて書き換えると、... there is something *that should be communicated* to someone for some purpose. となる。

There were many other views *to be shown*, and though the weather was hot, there were shady lanes wherever they wanted to go. (Jane Austen, *Mansfield Park*)

(示されるべき別の見解は沢山あったし、天気は暑かったが、彼らが行きたいと思うところはどこでも陰の多い小道があった。)

不定詞の意味上の主語を書く必要がないので、不定詞の態は受動態になる。なお、上と同じ試みをする、There were many other views *that should be shown*. . . となる。

まとめとして、次のことが言える。即ち、不定詞の意味上の主語がさほど重要でない場合や、明らかでない場合、不定詞の態は受動態となる。

### 3.3. 視点と態の関係

3.1で述べたように、また用例による検証の結果、次のことが言える。即ち、不定詞の行為者が *for* で示された場合、また示されていなくても文脈上明確である場合、書き手または話し手の視点は不定詞の行為者におかれ、不定詞の態は能動態となる。一方、不定詞の行為者が明確ではなく、さほど重要でない場合、即ち視点が中立である場合、不定詞の態は受動態となる。この場合、“*that can be*” という意味を含意している場合が多い。

## 4. 結論

不定詞の歴史的発達と態の関連、及び視点という観点から、不定詞の態について考察してきた。不定詞の起源が中性名詞であったことは事実であり、名詞から発生したが故に態は未分化であると考えているが、実証することはできない。受動形不定詞の発達を見逃すことができないからである。しかし、不定詞の態を決定する要素に、不定詞の起源が中性名詞であったことを挙げることはできると考える。

次に「視点」についてであるが、不定詞の部分に関係代名詞を用いて書き換えて、①There is no time to lose と②There is no time to be lost が別物であることを述べ、実際の用例に和訳を加えながら考察してきた。①の場合、不定詞の行為者は表面には現われていないが、それを補って関係代名詞を用いて書き換えると、関係節中の動詞も能動態となる。一方②では、不定詞の行為者は中立的で、さほど重要視されていないので、①と同じ作業をすると、関係節の動詞は受動態となる。不定詞の態を決定する要素の2番目、かつ最終の要素として、書き手（話し手）の視点の移動が挙げられると考えられる。

以上のことより、遡及的不定詞の態は、不定詞の起源が中性名詞であったことにより、一部未分化であることと、書き手（話し手）の視点により決定づけられることを筆者の結論とする。

#### 引用資料

- Austen, Jane, *Mansfield Park*. Oxford: Oxford University Press, 1998.  
*Scientific American*, May 2002, August 2002, December 2002.

British National Corpus (BNC).

#### 参考文献

- 荒木一雄, 宇賀治正朋『英語学大系 10 英語史ⅢA』大修館書店, 1984。  
 福村虎次郎『英文法シリーズ 11 時制と態』研究社, 1980。  
 Jespersen, Otto. *A Modern English Grammar on Historical Principles V*, London: George Allen & Unwin, reprinted, 1961.  
 中島文雄『英語発達史』岩波全書, 1976。  
 中尾俊夫『英語学大系 9 英語史Ⅱ』大修館書店, 1979。  
 太田正之「ある種の不定詞の態について」『筑波英語教育 第4号』, 1983。  
 小川三郎『英文法シリーズ 16 不定詞』研究社, 1980。  
 Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. *A Comprehensive Grammar of English Language*, London: Longman, 2003.  
 宇賀治正朋「不定詞の歴史的発達」『英語青年 2001. 10』研究社, 2001。  
 埋橋勇三「不定詞」『白山英米文学』(東洋大学文学部英米学科研究室), 1983。  
 和田四郎「不定詞の『形容詞用法』管見」『神戸外大論叢 46(1)』, 1995。